第 61 回神奈川建築コンクール　住宅部門審査総評

審査委員　小泉　雅生

神奈川県下の住宅に関するキーワードがいくつかあるが、その一つに「郊外」というものがあげられる。高度経済成長期に、住居数の不足を背景に、居住域は都心部から離れたいわゆる郊外へと広がった。しかし、広がらざるを得なかったというのが実情で、郊外住宅地という言葉には、凡庸でつまらない、均質化した、といったイメージがつきまとう。居住空間としての「郊外」の魅力の追求はなされてこなかったのではないか。しかし、社会が縮小していく状況下で郊外住宅地が生き残りをはかるには、あらためて「郊外」の魅力を見いだしアピールしていくことが不可欠だろう。

今回審査対象となった住宅には、鎌倉や大磯といった土地の魅力を謳うものがいくつかあった。また、リタイア後のシニア世代をターゲットとした良質の素材にこだわった住まいや、建築家の自邸として自らの理想を追い求めるような作品性の高い住宅も見受けられた。こういったゆとりある上質な暮らしをサポートする住宅に、郊外住宅地のこれからを考える大きなヒントがあるように思う。今後、不動産の貨幣的な価値は下落せざるを得ないのかもしれないが、貨幣価値でははかることのできない暮らしの「質」を担保する郊外住宅を期待したい。

そのような観点からすると、最優秀賞となった**「大磯の家」**は、建築空間と上述した暮らしの「質」、住まい手のキャラクターが見事にシンクロした住宅であった。詳細は個別の評にゆだねるが、強く印象に残ったプロジェクトであった。以下、優秀賞となった**「雪ノ下の家」「風の丘の家」**はともに建築家の自邸である。建築のプロフェッショナルとして、妥協なく「建築作品」の可能性を追求し、実現したものといえよう。周囲の自然や眺望を活かした完成度の高い「美しい建築」は、誰にでも分かる明快なメッセージとなっていた。**「Oiso House by MoM’s」**も建築家の自邸であるが、スタンスは少し異なり、子どもに向ける母の暖かい眼差しが感じられるものとなっていた。あらためて、住宅が生活の器であり人生の背景となることを思い起こさせられた。

「大倉山シニアハウス＋」は、収益重視となりがちな賃貸集合住宅でありながら、共用空間を充実させ、住民のつながりを作り出すことに注力されている。**「本郷町の低炭素住宅」**では、融資における優位性を利用して、環境配慮という観点での性能向上が意欲的にはかられている。いずれも、建築を巡る価値の転換を踏まえた作品であり、郊外における建築が今後目指すべき方向性を示唆するものといえよう。

「逗子の家」は終の住処としてシニア世代を、**「鎌倉腰越の家」**は一次取得の子育て世代を対象とした住宅であったが、どちらも郊外に立地する敷地条件を読み解き、丹念に作られた住宅であった。設計者の生活に寄り添う姿勢に好感をもった。

アピール賞となった**「擁壁と屋根／対行政住宅」**についても、郊外住宅の今後という観点

から述べておきたい。県下に多く存する郊外住宅地において、初期の入居者からの代替わりが今後スムーズに行われるかが懸念されるような状況となっている。その重い課題に真っ正面から向き合い、課題を抱える郊外住宅地における可能性を示した建築家の姿勢を高く評価したい。

最後に**「東門前の二世帯住宅」**は、郊外型とは異なり、3 層にわたって 2 世帯 3 世代＋犬 3 匹が暮らす都市型の住居である。各階で異なる平面構成となっているが、それらは敷地条件やライフスタイルに沿った結果であり、通風・採光の確保、生活者相互の適度な距離の創出へとつなげている。建て込んだ周辺環境の下で、密度が高いながらも快適な住まいをさりげなく実現しているところに、設計者の並々ならぬ力量が感じられた。

入選作品は、いずれも見応えがあり、深く考えさせられるものばかりであった。惜しくも選に漏れた中にも、同様の問題提起がなされているものもあった。審査員としては悩ましくも、うれしい審査であった。